

## <セッション2>

### 超高齢社会における歯科医師の養成とIT教材の活用

#### － 学ぶべき課題とIT教材の活用 －

高齢者の特性を理解し、他の医療者と連携し適切な医療を実践する。(WG3, WG4:チーム医療)

全身疾患や薬物治療に対する知識や理解 (WG2:基礎疾患を有する患者の歯科診療)

全身疾患と口腔症状の関連の理解(WG1:口腔乾燥症)

上記以外に加えたほうが良いと考える教材について記入してください

#### 昭和大学

- ・ 開業医において全身疾患患者が受診した時に、すぐに疾患が確認できるように簡便化すると使用しやすい。今のものだと問題を解くようになっている。
- ・ 高血圧、狭心症があつて、「認知症」がない。
- ・ ビデオライブラリーは15分くらいにまとめてほしい。長くて途中でやめてしまった。日歯のビデオライブラリーは5分程度。⇒学生用教材とは別物として考える必要がある。
- ・ 学生が実際臨床にでる前に、学習しておいてほしい項目。不整脈、糖尿、BP製剤:事例と対応策について。
- ・ 「ガイドラインをみて学習する」という方法を習得しておくべき。情報を収集して、考察する能力が必要。生涯学習。
- ・ 医科とのディスカッションができる知識力が必要。
- ・ 「口腔乾燥症」1つとってみても、教科書的なところと臨床的なところで相違がある。しかし、実際に症例と対峙した時に疾患の原因を特定するためにも知識は必要。
- ・ netも信頼性のある情報をpick upする能力が必要。
- ・ 学生の授業の段階で「周術期口腔機能管理」を学ぶことが必要。
- ・ 全身の健康に関与する歯科治療。現在は症状が出現してから歯科を受診して対応している状態であるが、重篤な症状が出現する前に治療する能力と積極性。「口から全身におよぼす健康」、ひいては歯科学学生の歯科医療に対する誇りの獲得に寄与。
- ・ 歯科医師会としては成人歯科検診や妊産婦検診の推進。
- ・ 開業医において全身疾患を有する患者の治療をするリスクが高い。来院患者がどれだけのリスクを有する患者なのか、を判断できる知識が必要。
- ・ 医科自体も歯科に対する知識が薄い。歯がどれだけ健康におよぼす影響が大きいかを啓蒙する必要がある。
- ・ 口腔機能低下症に対する検査項目が様々あり、ガイドラインもできてきている。ex)細菌カウンターなど。
- ・ 様々な検査からでてくる数値よりも、写真での学習が大切。特に粘膜。正常所見をみているからこそ、異常所見を判別できる。
- ・ 「oral assessment guide」のように、他職種の人と患者の症状に対しての統一見解を共有できるようにすることも大切。

## 岩手医科大学

- 全体的には G1-G4まで各グループ間の連携がない。
- 口腔乾燥症に特化しすぎている。  
加齢による口腔内環境変化の全体的な話から進める。  
口腔乾燥症により併発する疾患についてまとめる。

### WG 2 全身疾患について

- 心疾患 弁膜疾患
- 高血圧症
- 呼吸器 COPD
- 骨粗鬆症 BP製剤
- 悪性腫瘍 口腔ケア

### WG 3

- 脳血管障害

### WG 4

- 摂食嚥下障害
- 訪問診療

### IT教材の応用

- 学生の臨床実習において外部協力施設・学内の歯科医師の教育用に使用する。

## 北海道医療大学

### 多職種連携について

- 歯科医師が連携する職種の内容と重要性について学ぶ。
- 多職種のカルテや医学用語について学ぶ。
- 摂食嚥下機能低下への対応 — 栄養サポートチームへの参画や臨床対応の実際
- 認知症の理解と対応を学ぶ — 介護
- 周術期の口腔ケア
- 現状の教材を歯科医師会の先生を通じて研修医向けに利用できるようアレンジを加える。
- 高齢者医療にかかわるアップデートが必要なガイドラインなどの情報を紹介するような仕組みを組み込む。